

19の講義内容 豊富な語彙を学ぼう(『分類語彙表』)

キーワード(同義語・広義語・狭義語・関連語・反義語)

語彙とは

語彙とは、端的に表現すると「語の集合」を云います。人が集まって家族を作り上げて、この一族と一族とが集合して一族を成し、部族と部族とが融合して村里を組織し、村里と村里が一つに併合して縣郡を形成し、縣郡と縣郡とが結合して、一つの国となります。更に、その小国と小国とが連合統治されて大国を誕生させるように、私たちのことばもこれと同じように統合分類されたり、あるときには逆に細密に区分類されていきます。現実には、同じ物体や景観を見ている、生まれや育ちが異なる世界にあるだけで、その認知度合いも、感じとり方も自ずと異なったものへと形成されていくこととなります。そこで人がそれぞれの事象に照らし併せて名付けた語(ことば)にも別の呼称が見られるようになるのです。とはいえ、元は一つですから、この語源を問い訊ねていくと、ことばの家族構成や組織が見えてくるのです。

特に人に不可欠なものの名前は、これを知りうる手懸かりとなる痕跡が遺っていて、なるほど、そういう意味だったのかと気づかされたことは、誰でも経験することだと思えます。たとえば、「塩」ということば、和語では「しお^{しほ}」とだけ云います。英語では「ソルト」、イタリア語で「サラリー」と表現されています。これらの語が同じ事物名をそれぞれの観点から命名して、それぞれの集団認識

語として確立されてきたわけです。この世界中の「しお【塩】」について、もつと教養を深めたい人は、渋谷にある「たばこと塩の博物館」に足を運ぶとより高度な文化に出会えるでしょう。次に、飲食物の一つである「茶^{ちや}」は、印度大陸を基点に瞬く間に世界中に広まり、国際言語社会のなかで今日「Tea」や「Tya」<茶>の二大別程で呼称表現されてきた語であります。この「茶葉」の産地名の名を取って、この茶の銘柄に名前が次から次と派生していきました。中国大陸から日本に渡来した「茶」も、その茶の植栽地名で呼ばれております。例えば「宇治茶」がその代表格で、他に「八女茶」「嬉野茶」「蘆北茶」「狭山茶」「静岡茶」が世に知られ、その精製方法によって「番茶」「煎茶」「焙茶」「緑茶」「玉露茶」「抹茶」とも呼称されてきています。こうしたことばのつながりを図式化すると、人の集合体(組織)のように統合化されて分類されていくのです。そこには風俗や文化というものが密接に影響してきています。人でも自分と同じ思考行動する人を集める場合と、自分とは全く異なる思考行動をする人を周囲に迎えることとが実際の人間社会には存ります。この全く異なる集合体づくりによって生きるに必要不可欠なものとしてのバランスを保持しているにすぎません。ことばでも長い間、永遠に連続して使っていますと、息苦しくなるものです。こうしたとき、外部から新鮮な息吹を求めてこれを受け容れることで、同じものでも別種なものに変容してきました。その「品格」を高めることで、そのものが有する価値観が変化していくのです。この変動は、実際に経験した事象を以てみれば、たちどころに理解が可能なものでしょう。たとえば、「日本国有鉄道」が民営化されたことで、横文字で「JR」(ジャパン・レール)に社名を変更したように、多くの組織がこの変更を試みました。時には組織合併が別の名称を誕生させていきました。この「ことばの命名(ネーミング)」について興味関心のある方は、その専門方面について各自が「スカイプ」を利用して学習することをお奨めします。

語彙を分類する

日本には、古来から中国の影響を受けてことばを意義分類により区分してきました。その代表的な分類方法が、当代の古字書及び古辞書類に見えております。平安時代の文章博士であった源順が編纂した『倭名類聚抄』には、「天地部・人倫部・形體部・疾病部・術藝部・居處部・舟車部・珍寶部・布帛部・裝束部・飲食部・器皿部・燈火部・調度部・羽族部・毛群部・牛馬部・龍魚部・龜貝部・虫豸部・稻穀部・菜蔬部・果麻部・草木部」と云った中国の類書に規範を求め、これを分類し、そこに一連の和漢のことばを収録して、その典拠名を明確に記録することで、当代の日本人に関心のある「ことばの典」を編纂しています。

鎌倉時代には宋風禅を学ぶために彼の地に渡海し、さらには室町時代に成ると、中国宋の国から日本に渡航した禪僧たちが、新たな唐宋音によることばの語を携えてきました。今日でも、「饅頭」「素麵」「蒲團」といったことばを聞いたことが在ろうかと思えます。このような唐宋音の語を反映した通俗古辞書が作成されました。文安元年(一四四四)に東麓破衲という僧侶によって『下學集』上下二冊から成る辞書がそれです。

その分類も、「天地門。時節門。神祇門。人倫門。官位門。人名門。家屋門。氣形門。支體門。態藝門。絹布門。飲食門。器財門。草木門。彩色門。數量門。言辭門。疊字門」の一八部門に分類され、和式漢字文で表記されています。

こうした類書に基づく分類方法が日本語の根底にはあります。この伝統は凡そ明治時代初期まで運用されていきました。

では、明治時代以降の語彙の分類方法はどうか？図書館の書籍を十進分類にしてコード化して、その書物の所在を決定するのと同じ方式で、「ことばの十進分類法」が考案されています。ことばを分類した『分類語辞典』には、それぞれ特徴のある辞書が幾つか編纂されています。

日本語の基幹語彙

実際の日本語の基幹語彙を見てみますと、私たちの生活に必要な語は、意外にも表出してきません。「理解語彙」や「使用語彙」とは異なる語群だとも言えましょう。

たとえば、仏教などで云うところの和語「さとり」という語は、漢字で表記するとどうなるのでしょうかと云えば、平安時代後期に成った古辞書に観智院本『類聚名義抄』があります。これを近代になつてですが、岡山出身の正宗敦夫さんがこの古辞書に対して、和訓を五十音順に並べ替えて、「假名索引」(「風間書房刊」)を編纂されています。今日の研究者はこの假名索引と漢字索引とを用いて、この「さとり」の項を確認することができます。「サトリ」という假名の語を和訓索引で調べてみますと、

【慧】【僧】【條】【進】【適】【達】【通】【躰】【聡】【喆】【轟】【哲】【呈】【喩】【見】【觀】【覺】【題】
【哲】【晤】【智】【服】【體】【解】【摠】【哲】【木】【諳】【讚】【識】【諷】【諭】【譚】【訥】【踰】
【彦】【性】【性】【慙】【憐】【憬】【慧】【悟】【懇】【秩】【積】【豪】【喜】【寤】【審】【察】【菴】【覆】

【度】【了】【蕪】【鎔】【威】【醒】【欠】【喩】【曉】

といった文字が検索できます。ここで用いられている和訓漢字の語は、文献資料であるこれまでの作品資料にどの程度が反映されているのかを知る手懸かりとなっています。書記する者が記述するこの「さととり」乃至「さとり」の意味で用いる漢字の標記は、僅か数文字に過ぎないのですが、仏典・漢籍、漢詩文、物語、記録類などに反映されて行きます。

更に、時代は降って室町時代になるとどうでしょうか。文明本(広本)『節用集』に収録する「さとる」の漢字を見てみますと、

【了】【覺】【智】【解】【悟】【喩】

の六字となっています。この漢字を以て、人名に充てるとその広がりは多少広がるのでしようが、これも人名「さととり」や「さとり」をここから抜粋していくと、これはお目にかからない漢字語が見えてきましよう。この漢字の集合は、和語「さととり」ということは明確ですが、実際の使用例から見られない、仏教語資料ならではの専門用語としてこれらの語がこの古辞書に網羅されていて収録されていることをはじめて自覚できるのです。こんなに、人が一生を過ごす間に一度も見聞きしない、言わば知らないままで終わる漢字語をここにほんの僅かですが、私たちは垣間見たわけです。次に同じことばを現代の小学館『日本国語大辞典』第二版に求めてみますと、

さととり【悟・覚】〔名〕(動詞)「さとり(悟)」の連用形の名詞化) 物事の道理をはつきりと知ること。理解。また、気付くこと。感知すること。察知。*日本書紀(七二〇)「仁徳即位前(前田本訓)「今、我は弟なり。且、文獻足らず」*日本書紀(七二〇)「仁徳即位前(前田本訓)「若し死りぬる者、知有らば、先の帝、我を何謂さむや」*大唐西域記卷十二平安中期点(九五〇頃)「衆生は随類の悟有り」*宇津保物語(九七〇〜九九九頃)「祭の使「私豊かにさととりなき学

生共には、豊かに給へれども」*書陵部本類聚名義抄(一一〇八一頃)「智慧 真云サトリ」仏語。迷いを去って真理を知ること。生死の世界を超越すること。*法華義疏長保四年点(一一〇〇二)五「迷を守る徒をして此に因て暁を得使めむとなり」*源氏物語(一一〇〇一〜一四頃)「説きおき給へる御法も、方便といふ事ありて、さととりなき者は、ここかしこたがふ疑ひをおきつべくなん」*山家集(十二C後)下「誓ひありて願はん国へ行くは西の門より悟り開かん」*平家物語(十三C前)「灌頂・六道之沙汰「異国の玄奘三蔵は、悟の前に六道を見」*集義和書(一六七六頃)一一「禅さとれりといへども、死を畏るるより悟を求む」*盤珪禪師法語(一七三〇)「悟は迷に対しての事也。人々仏体にして、一点も迷ひなし」【発音】平安・室町・江戸【辞書】名義・和玉・日葡・ヘボン・言海【表記】慧(名義)暁(和玉)悟(ヘボン)覚(言海)【項目】①さとりの雲②さとりの花③さとりの母④さとりの道⑤さとりを開く

と記述されています。このなかには、上記に引用した古辞書『類聚名義抄』も見えていますが、その全貌をこの国語辞書が記すものではありませんからご留意して下さい。

〔補助資料〕『大辞泉』所載、「類聚名義抄」るいじゅみょうぎしよう(ルイジユミヤウギセウ)平安末期の漢和辞書。編者未詳。仏・法・僧の三部からなり、一二〇の部首によって漢字を分類し、字音・字義・和訓などを注記し、和訓には声点によってアクセントが示される。別名に名義抄。

智慧

弘云胡桂又象、精明、中、胡桂又象、精明、中、胡桂又象、精明

智慧

炎云恵上

弘云胡桂

平去

反。

絮、精明、

中云解、明、

真云サトリ

上上

〔心部 236 ④〕。

〔心部 236 ④〕。

〔心部 236 ④〕。

〔心部 236 ④〕。

〔心部 236 ④〕。

〔心部 236 ④〕。

〔心部 236 ④〕。

〔心部 236 ④〕。

※「真興・真」人名。『大般若経音訓』四卷。真興(933-1004)撰。逸書。

出典表記(頻度)は、真興(1)、真(668)、如真興音義第二(1)、真「虫」(1)、同「真」(2)、又「真」(4)、又「真興」(1)。「真」等の注記の存する掲出項(熟語)が大般若経に見える述語ないし固有名詞であること、鵝珠抄巻末記載の重誉撰『大般若経音義』との類似などから、『大般若経音訓』であることが判明。「真」等には、漢文の音注釈義の他に片仮名の和音・和訓を引く(以上、吉田(1954b:15))。片仮名の注は、逸文に和訓の見えないことから、大般若経音訓とは別書ではないかとする見解(築島(1959)、築島(1960:10)、築島(1963b:28))もあつたが、逸文と図書寮本の注文形式の分析から、片仮名音注は、『大般若経音訓』の傍書片仮名音注を採録したもの、和訓注記は多分なし、と修正された(築島(1973))。叡山文庫蔵『息心抄』所引の『真興音訓逸文』との比較から、採録の序列は、慈恩、玄応、中算より下位、上位出典に重ならない部分を引くこと、全載の方針であると推定(山本(1990))。真興の音注は漢字音研究の重要資料である(沼本(1978a))。「池田証壽『図書寮本類聚名義抄出典略注』から抜粋」

次に人名漢字としての「さとる」を見てみましょう。

里・智・悟・聡・郷・覺・慧・賢・哲・怜・敏・諭・哲・聖・暁〔暁〕・識・学〔學〕・了・解
・敬・恵・惺・啓・知・理・達・仏〔佛〕・束留

これらの漢字が凡て「さとる」と読む文字です。実際に漢和辞典を繙いて確認していきましょう。

分類の基準

いよいよ実際に、ことばそのものを分類してみることにしましょう。まず此の画像を御覧願います。

家の軒先に魚を干した物です。この干し物を日本人は何と呼称して来たでしょうか？日本では「奈良時代まで遡る干物の歴史」を世界で見ると、干し物の歴史は、「エジプトの壁画」(カッサラというところにある五千年前のもっとも古いステップピラミッドに描かれた壁画です。古代エジプトが魚を開いているんで様子)」が描写されています。

《図1》日本の「楚割」の風景



《図2》エジプトの壁画



この干し物にどのような名前を見ることが出来るのでしょうか……。また、あなたであれば、どのような呼び名をこの干し物につけますか？ 実際なことばを慥かめて行きましょう！

《参考資料》

角川類語国語辞典〔角川書店刊〕

デジタル類語辞典〔三十万語収録、Jungle刊〕

国立国語研究所編『分類語彙表』増補改訂版〔大日本図書刊〕